

じょうぜん みず ごと みず よ ばんぶつ り しか あらそ しゅうじん にく  
上善は水の如し。水は善く万物を利して而も争わず。衆人の悪  
ところ お ゆえ みち ちか きよ よ ち ころよ よ ふか  
お所に処る。故に道に幾し。居は善く地をなし、心は善く淵め、  
とも よ いつくし げん よ しん まつりごと よ おき こと よ  
与は善く仁み、言は善く信をかわし、政は善く治め、事は善く  
のう どう よ とぎ そ た あらそ ゆえ とが な  
能あらしめ、動は善く時をなす。夫れ唯だ争わず、故に尤め無  
し。

【大体の意味内容】最上の善とは、水の働きのようなものだ。水は万物の生長を助けて、し  
かも競い合うということがない。誰もが嫌がる低地にとどまっている。それゆえに、全生命の  
源である「道」の原理に近い存在といえる。(こうした原理が働く世界においては、次のよ  
うなことがごく平凡な常識となる)。大地に善悪はない。大地の生命力に畏敬の念をもつて  
居住することで、そこは素晴らしい地となるのだ。心を尽くして関わることで、日常卑近な  
すべてのことに、深まりが生じる。他者に分け与えつつ、ともに生きること、仁愛の情も  
自然に育まれる。命の琴線を鳴らす言葉は、時間・空間、人種や民族などの壁を越えて、人々  
の魂を交信させる。神を祀るようにして人々に奉仕する 政 によって、この世は美しく治  
まる。仕事に取り組むことで、人々の能力は開発され、よどむことなく流動して、充実した  
時間が刻まれる。そもそも、ただひたすら、争うということは、しない。であるから、罪科と  
いった概念自体が、存在しないのである。

今年二〇一八年六月二十三日、沖縄県糸満市摩文仁の平和記念公園で開かれた沖縄全戦没者追悼式  
の場で、まさに神憑りとしか思えないような詩の朗読が行われました。浦添市立港川中学校三年相良

倫子さんの「生れぬ」。六月十四日の新聞朝日に全文掲載されていますので是非お読みください（「チロー」でも <https://www.youtube.com/watch?v=cNVSTctD1Gs>）。

彼女はまだ一四歳、当然、十二年前の沖繩戦をきっかけ体験してはみせぬ。だが、あつ子の大地やその地じろあつ子に生れぬあつ子に命だちが伝えぬ記憶を、取っ繕って生れぬのよ。」「壊れたて、奪われた」「無辜の命」たちが憑依して、未来に生を享ける未来の魂たちとも交信する、霊媒の様にあってしまった。

「戦力という憑かな力を持つじよど、悔ひたる平和なよ、本当も無さ」「平和よ、あだの地じ生れぬじよ。その命を精一杯輝かせ生れぬじよ」。

『き子』の右の文章、「上善は水の如し」を、よく知らなうかもつたませんが、「知識」はあつ子も、き子と同じ「智慧」を持ったわけじゃあ。

じの長文の詩の締めよつた、ズノのよじよ讀らあつたわ。

摩文仁の丘の風に吹かれ、

私の命が鳴っている。

過去と現在、未来の共鳴。

鎮魂歌も届け。悲しみの過去に。

命も響け。生れぬ未来に。

私は今を、生れぬじよ。